令和3年度　第１回文京区生物多様性地域戦略協議会資料　意見・質問（要旨）

項目	意見・質問（要旨）	回答・対応
資料第1号	北限で見られた生物も次第に南下しております。又、南限で見られた生物も北上しております。どこでも見られて良いかもしれませんがそれは違うと思います。やはり北でしか見られない、又は南でしか見られない。それが自然の姿だと思います。 それには私達一人一人が小さくても緑化を進めていく方法が有るのではないでしょうか。ビオトープ（生物生息空間）を或る建築会社が取り組んでいるそうです。いわゆる屋上緑化です。それが広がればヒートアイランドも少しは解消されるのではないでしょうか。 私達区民一人一人が小さくても緑化を進めれば、生物が増え子供達も観察の場ができます。それによってアンケートの中にある「知らない」「していない」の数字が変わると思います。 文の京生きもの図鑑には絶滅危惧の生物は載せる予定は無いのでしょうか。 発刊を楽しみにしております。	区では、一人一人が小さくても緑化を進めていく方法として、「手づくりビオトープ」の取組を周知啓発しています。手づくりビオトープは、住宅の庭、軒先、ベランダ等の小さくて狭いスペースでも、ビオトープ（生きものの生息場所）をみんなで手づくりしてつなげていく取組で、教育センターに「手づくりビオトープ」の見本を設置し、HPで紹介しております。手づくりビオトープを区内に広めていくことで、蝶等の生きものの暮らす場所を増やしていきたいと考えております。 また、図鑑には、区内で確認された環境省や東京都のレッドリスト等に選定されている種を「重要種」として掲載する予定です。
資料第1号	資料第1号のp13にある7－2 ススキ植生の一部を50㎝残した、とありますが、これは高さ50㎝で刈り残したという意味でしょうか？あるいは、幅でしょうか？	生物多様性に配慮した草刈方法として、植生の高さを残しました。
資料第1号	「生物多様性の保全への取組を実施している事業者」に関して、大規模事業者の割合が7割超から5割に急減したのは何故か、追加でヒアリングを実施すべきと考えます。特に、自社に「関係がない」の割合が19％に増加しており、異動などで社内引継ぎが適切に行われていない可能性もあります。	アンケートは匿名での実施のため追加ヒアリングは困難ですが、事業者は、事業活動を通じて生物多様性と深く関わり、影響を及ぼすことについては、引き続き周知してまいります。
資料第1号	「生物多様性の保全への取組を実施している事業者」に関して、中小規模事業者の割合が、従来同様２割未満に留まっています。「生物多様性の保全への取組」が具体的にどのような取組を意味するのかが想像できない事業者も多数存在すると考えられます。区内の生物を思い浮かべた回答者は、「関係がない」を選んでしまうものと思われます。しかし、海外で森林伐採を伴って生産された紙を調達しない、乱獲されている水産物を調達しないといった行動が、実は「生物多様性の保全への取組」に含まれることを周知すれば、意識改善をもたらすきっかけになるのではないでしょうか。少なくとも、「関係がない」を選ぶ割合は減っていくはずです。	毎年実施している事業者対象のアンケート調査票に、生物多様性と事業活動の関わりを記載する等、事業活動が生物多様性と関係していることが認識できるような周知方法を検討してまいります。
資料第1号	ｐ22「原材料調達や販売の際など、事業活動ごとの生物多様性に関する事業者の具体的な行動を、区HPや地域戦略概要版等で周知」および「認証ラベル等の周知を引き続き行い、環境に配慮した商品の購入を促していく」について：事業者や消費者に周知する情報として、日本マクドナルドやイオンの「調達方針」や活用している「認証ラベル」などの取組事例が有効ではないかと考えます。例えば日本マクドナルドは、紙の容器包装やトレーシートなどの全てにFSC認証、フィレオフィッシュにMSC認証、揚げ油にRSPO認証を採用し、原材料の持続可能性を担保しています。	事業者への生物多様性に関する取組事例については、環境省で作成している「生物多様性民間参画　事例集」について周知を行う等、事業プロセスの段階ごとに各種事業者の取組を紹介し、意識啓発を図ってまいります。

項目	意見・質問（要旨）	回答・対応
資料第3号	１．［生きもの生息環境の特徴］について 対象となっているのが、区が管理する施設やエリアに限定されているので、可能であれば範囲を広げたほうが、区民にとってより身近でなじみのある環境を取り上げることができると思います。 文京区と言えば学校施設や公園が多い、と誰しもが連想するように、国立や私立学校数が多い、都が管理する有名な名勝（小石川後楽園や六義園）がある、大学が管理する研究施設（東京大学附属小石川植物園）があるといったことが文京区の特徴だと思います。 文京区の特徴的な部分をとりあげるほうが、＜生きもの図鑑のねらい＞に書かれている地域社会の活性化に貢献できると思います。	図鑑に掲載する「生きもの生息環境」については、区有施設以外の学校施設や公園、神田川など様々な区内の環境特性を類型化して紹介することを検討してまいります。
資料第3号	２．［文京区の外来種］について 　本学でもハクビシンなどの外来種は駆除を行っています。外来種は、生態系維持のためには排除すべきことは理解しますが、実際には日常生活においては、在来種も外来種も区別することなく生きものとして認識しています。生息エリアや特徴などの情報を、在来種と外来種ともに同列で扱うほうが面白いと思います。	区では、特に植物に至っては、人為的に植えられた植栽や逸出したと思われる種が優占しております。このような状況を負に捉えるのではなく、人の生活・文化とともに歩んで培われてきた区の生物多様性らしさとして示しつつ、在来種への配慮の必要性について周知できるような工夫を検討してまいります。特定外来生物については、区内確認種と、法で禁止されている事項を記載することを予定しております。
資料第3号	資料第3号　図鑑の付録「生きもの観察あれこれ」に観察のポイント等のほか、フィールドマナーについても触れることで、観察の場所と周辺の方も気持ちよく協力ができるよう理解を深め、行動していただくとよいものと考えます。 また、その他、水辺の観察などにおける危険回避についても簡単で結構ですので触れておくとよいかと考えます。	図鑑の「生きもの観察あれこれ」には、フィールド観察のマナーや、安全配慮事項等についても記載する予定となっております。
資料第3号	「文京区の生きもの」には掲載されているが、付録の「文京区での生きもの確認種リスト」には掲載されない種が出てくると思われるが、そのギャップについて疑問を持つ子どもたちにはどのように説明をするのか？生物多様性の喪失やその原因についても、どこかでふれた方たよいように思われます。	「文京区の生きもの」には、70～80種程度の動植物の写真と解説文を記載する予定となっております。一方、付録の「文京区での生きもの確認種リスト」には、「文京区の生きもの」に掲載する種も含め、これまでの調査や写真館の投稿写真で確認された動植物の一覧を掲載する予定です。
資料第3号	エシカル・コンサンプションや認証マークを紹介するコラムがあるとよいのではないでしょうか。 「コラム　食生活の中の生物多様性」がそれに当たりますか？	図鑑の「私たちの生活と生物多様性」という項目の中で、エシカル消費や認証マーク等について記載する予定となっております。

項目	意見・質問（要旨）	回答・対応
その他	文京区のような海、川（神田川のような小さな川はあるが多摩川、荒川のような大きなものは無い）、山が無い地域において生物の多様性について考えるのは大分困難であると思いますので、他の区でも行っているような「生きもの図鑑」を作成するのも1方法かと思います。	区内に海はありませんが、区内生きもの図鑑を作成し、神田川やまとまった緑の動植物の生息状況について紹介していく予定です。
その他	都心だろうと田舎だろうとどこにでも害虫が存在します。生物多様性の面で彼等の側から考えると彼等にも生きる権利があるように見えるのですが、この地球上では生物の頂点に人間が存在し、他の生物は生きとし生けるものは生き残り、必要のないものは淘汰されていきます。稲をはじめとする野菜類へ寄生する害虫は農薬で始末しなくてはそれらは育ちません。害虫や病気の原因となる生きものたちは絶滅しても構わないでしょうと思うので害虫に関しても述べたらどうでしょうか？ 蠅、蚊、ダニ、蚤、ゴキブリ、（これらにもいろいろ種類がありますが）まだありますか？これらのものに関しての資料はすでに存在しているかどうか知りませんが、無ければ、作成すれば役に立つかもしれません。	図鑑では、生物多様性に配慮した商品やサービス、日常生活の在り方について記載する予定となっており、その中で、害虫に関する配慮の在り方等についても検討してまいります。
その他	文京区の生物の以前の多様性は確かに、文京区の自然環境の移り変わり（生物多様性地域戦略ｐ２０～２６）で述べられていますが、たとえばホタルはｐ２４，２５に は昭和初期に千川にいたと記載がありますが、言問通り清水橋あたりにも沢山いたようです。暗渠になるまでは、怖くなるような藪で他の生物もたくさんいたそうです。まだまだ生々しい明治を含めた多様性に関する記憶は区民の中に保存されていると思います。これらの掘り起こしを行い、過去の多様性を豊かな興味深いものにしていってほしい。ちなみに私の育った本郷追分（向丘２丁目）は戦後すぐは牧場で牛がいたそうです。 また、将来の文京区の多様性について、今の取組みにより明るくも暗くもなるとい う項目を具体的に取り上げるべきと思います。	図鑑のコラム「文京区の自然環境の移り変わり」では、生物多様性地域戦略からの引用だけではなく、わかりやすい例示になるようなものなどの掘り起こしも含めて検討します。 また、将来の文京区の多様性についても、コラム「生物多様性に迫る危機」の中で検討してまいります。